第１問

45度線モデルを用いた乗数効果の問題である。

（設問１）

問題の構造を理解した上で、シンプルに乗数効果で考えたい。本問のモデルは閉鎖経済であり、限界輸入性向は存在しないため、限界消費性向ｃ＝0.75で考えれば良い。

$$政府支出＝\frac{1}{1－c\ (0.75)}＝4$$

$$租税乗数＝\frac{c\ (0.75)}{1－c\ (0.75)}＝3$$

従って、正解はエである。

（解　答）

エ

（重要度）

Ａ

（ベースとなる本試験問題）

平成28年第８問（設問１）

（設問２）

Ｉ＋Ｇとは、民間投資額と政府支出額の合計ということになる（ちなみに総需要曲線の切片は、Ｉ＋Ｇ＋Ｃoである）。

投資乗数と政府支出乗数は同じ計算式で求められるため、乗数効果は４となる。両者合計が５だけ増したのなら、乗数効果によって均衡国民所得は４倍、つまり20だけ現状より増すことになる。従って、正解はウである。

（解　答）

ウ

（重要度）

Ａ

（ベースとなる本試験問題）

平成28年第８問（設問２）

第２問

ア　適切。総需要ＡＤ線の切片は独立消費と投資の和であり、（Ｃｏ＋Ｉｏ）となる。

イ　適切。総需要ＡＤ線の傾きは限界消費性向である。

ウ　不適切。限界貯蓄性向が小さいということは、限界消費性向が大きくなる。そのため、総需要ＡＤ線の傾きが大きくなり、直線の勾配は激しくなる。

エ　適切。独立消費が減少すれば切片の値が小さくなり、総需要ＡＤ線は下方にシフトする。

オ　適切。独立投資が増加すれば切片の値が大きくなり、総需要ＡＤ線は上方にシフトする。

（解　答）

ウ

（重要度）

Ａ

（ベースとなる本試験問題）

平成17年第２問（設問１）

第３問

ＧＤＰデフレーターは、名目ＧＤＰを実質ＧＤＰで割って求める、パーシェ指数の１種である。パーシェ指数（パーチェ式）は、比較年にウエイトを置いて算出する。なお、基準年にウエイトを置いて算出する方式をラスパイル指数という。

従って、アが適切である。

（解　答）

ア

（重要度）

Ａ

（ベースとなる本試験問題）

平成13年第４問

第４問

（設問１）

ＩＳ－ＬＭ分析に関する出題であり、比較的容易な問題と言える。

ア　不適切。投資の利子弾力性が大きければ大きいほど、ＩＳ曲線の傾きは緩やかとなる。